

令和8年度 一般選抜試験

国語 (解答はすべて解答用紙に記入すること)

埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校

受験番号
氏名

無断転載・複製を禁ず

国語 (解答はすべて解答用紙に記入すること)

埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①感性の構造を論ずるからには、まず、(1)感性とは何か、ということを確認しておかねばなるまい。なぜ、そんな分かりきったことをわざわざ問題にするのか、と(a)フシンに思うひともあろう。問うまでもなく「感性」とは自明のことだ、と思っているひとは、二文字の漢字の字義に従って、これを理解しているに相違ない。その場合、「性」の字は、「性質」の意だが、「理性」や「悟性」との(X)を意識することができれば、それは精神の性質、より適切に言えば精神の能力、はたらき方のことだ、というふうに理解できる。従って、「感性」とは、「感ずるはたらき」ということになる。この字義のレベルに関して、わたしは何も異論があるわけではない。だが、この「感ずるはたらき」としての感性が具体的にどのようなことがらを指しているかについては、ひとによって考えるものが違う、という可能性のあることを意識する必要があると思う。「感ずる」とは相当に多義的な語だからである。(I)次の七つを考えてみよう。

- A 指先に痛みを感じた。
- B ※イブ・クラインの絵の青に、独特なものを感じた。
- C イブ・クラインの絵の青に、地中海を感じた。
- D その寒村のたたずまいに、何とも言えない侘しさを感じた。
- E 部屋に入ると、誰もいないはずの空間に、ひとの気配を感じた。
- F その発言を聞くと、突然の憎しみを感じた。
- G かれの説得を意気を感じて、その仕事を引き受けた。

Aは(①)的な感覚、Bは一般に美的な知覚と呼ばれているもので、対象の性質の(b)ハアクと観賞、Cはそこに発する(②)、Dはやはり対象の性質を捉えているが、それは情感的なものである。Eは(③)的事実に関する「感覚」だが、これと言って指さして示すことのできるようなことではなく、その限りで「漠たる」ものと言われるような事態に関する知覚である。Fは対象ではなく自分の心のなかに起こった情感、あるいは情念であり、Gは行動につながる(④)である。

(2)「感性」と聞いて、わたしはAを考え、それを自明な、言い換えれば誰もがそう理解しているものと思っ

ていても、かれはBを、彼女はCのことを念頭において、「感性」とは自明のことだ、と考えている。ということが、大いにありそうである。

②(Ⅱ)、『新明解国語辞典』(第五版)の定義を参照してみよう。そこに記されている第一の意味は次のようなものである。

外界の刺激に応じてなんらかの印象を感じ取る、その人の直感的な心の働き。「欲求・感情・情緒に関する点で、意志・知性と区別される」

これは、哲学者が書いたものなのか、あるいは哲学者の書いたものを参照して国語学者が書いたものなのか。辞典には何の注記もないが、哲学臭のようなものが感じられる。(このような知覚もしくは認識のものが右の(⑤)に相当する感性に相違ない)。特にかつこに入れて付言されている部分がそうである。それでも、右に示した多義性を掬い取っているところには、(c)カシンさせられる。しかし、すぐに次々と疑問が湧いてくる。まず、定義の本文とかつこの内の付言とは、本当に照応しているのか。言い換えれば、同じことを言っているのだろうか。それと言うのも、外界の「印象」が「欲求・感情・情緒に関する」ものなのだろうか、と思われるからである。特に「印象」と「欲求」はつながらない。一方は受動、他方は(Y)のはたらきである。

「感情・情緒」の方はどうか。たしかに印象は、感情や情緒に(d)彩られていることがある。しかし常にそうだとは言えない。

無断転載・複製を禁ず

青を知覚して、爽やかさを感じることもあるが、哀しみを覚えるかもしれないし、なにも情感を覚えない、ということもある。特に美学において、右に挙げたBの「感ずる」は、情感を欠いたものと考えられている。もしも、「印象」には必ず感情的、情感的な反応が伴うとするならば、右の定義は「感性」の一部分にしか当てはまらず、しかも美学において重要な部分を見過している、ということになる。

(Ⅲ)、「欲求に関する点で、意志と区別される」という指摘には、いささか困惑を覚える。意志のはたらきは、まさに欲求することではないのか。敢えて(e)額面通りに受けとるなら、この指摘は、「意志のはたらきは、欲求することとは異なる」という主張を含意している。つまり、何かを求める意志のはたらきは「欲求」とは呼ばず、それと区別しなければならぬ、という考えである(このあたりの微細な区別こそ、右に指摘した「(Z)」のおおもとに相違ない)。意志は明確な自覚と判断に基づくもので、それに対して「欲求」の典型は「生理的欲求」のようなものに見られる、ということであろう。だが、そのような「欲求」は、外界から受けた刺激によつて生じた印象によるものであるのか。確かに、ビールのコマーシャルを見て、ビールが飲みたくなる、ということはある。しかし、それを「感性」とは言わないだろう。また、欲求自体を考えるなら、それは外界からの刺激がなくとも、からだのなから湧き起こってくるものである。

[3] (Ⅳ)、国語辞典の定義は、とても明快とは言えない。だが、以上の検討を通して、問題の核心が見えてきたように思われる。それは、対象の性質に関する客観的な知覚と、その知覚に伴って起こる感情的、情感的な反応とを、まずは区別し、そのうえで両者の関係を考えることが必要になろう、ということである。このように言い表わしてみると、直ちに右の事例Aが違和感を惹起する。わたしが痛みを感じている指先は対象と言えるのかという違和感である。青い空は、物体ではなくとも、(ア)と呼ぶことができよう。それを知覚するわたしの意識は、意識の圏域を超え、目という身体の器官を介し、それを抜け出て、外に向かっているからである。だが、(イ)指先はあくまでわたしの内にある。そのように考えてみると、わたしが「感ずる」ものは、外界にある対象から、わたしの身体を介して、心理の次元へと、アナログ的に広がっていることが分かる。右に挙げた七つのケースは、このような広がりを表すものであった。その広がりとは、身体によつて媒介された外的世界とわたしの意識とをつなぐ回路の広がりであり、われわれが生きてあるその具体相の広がりである。「感ずる」ということが、身体的な精神のはたらきであることは、誰もが感じているに相違ない。言葉でそう認識していることがなくとも、身体がなくなれば、痛みはもとより、空の青さも、その爽やかさも、また人に対する愛や(ウ)憎しみもなくなってしまうだろう、ということは、誰もが認めているはずだ。このように広い領域にわたるはたらきを感性と呼ぶならば、その定義が難しく、曖昧さを免れないことは、容易に理解できる。それは、身体的存在そのものの曖昧さである。

※「イブ・クライン」フランスの前衛画家(一九二八〜六二)

(佐々木健一『日本の感性』より一部改変)

問一 傍線部(a) (e)の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二 空欄Ⅰ〜Ⅳに入る適当と思われるものはそれぞれか、次の中から選んで記号で答えよ。ただしそれぞれ一回のみ使用せよ。

ア このようなわけで イ 更に ウ 例えば エ そこで

問三 空欄Xに入る適語はどれか、次の中から選んで記号で答えよ。

ア パラドックス イ アレゴリー ウ リアリティ エ アナロジー

問四 空欄Yに入る漢字二字の適語を答えよ。

問五 空欄Zに入る三字の適語を本文より書き抜け。

問六 空欄①～④入る適語はどれか、次の中から選んでそれぞれ記号で答えよ。

ア 連想 イ 共感 ウ 客観 エ 身体

問七 空欄⑤には本文中のA～Gのどれが入るのか。記号で答よ。

問八 傍線部(1)「感性とは何か」とあるが、筆者の考えを③段落より15字以内で書き抜け。

問九 傍線部(2)は、「感性という語」のどういう特徴を示しているか。②段落より3字で示せ。

問十 空欄(ア)に入る言葉、また傍線部(イ)「指先」、(ウ)「憎しみ」は何の具体例か。3段落よりそれぞれ二字の熟語で示せ。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①ものの音や状態などを表す擬音語・擬(A)語(オノマトペ)は外国語にもある。(a) ナンオウのバスク語で「グルカグルカ」とは、水などを飲む時のごくごくにあたるそうだ。インドネシアのカンペラ語の「ンプトウ」は、重い物が落ちた音。日本語ならば、どさりだろうか。今井むつみ、秋田喜美著『言語の本質』に教わった。

②全く知らない言語なのに、音の響きから何となく雰囲気は伝わってくるのがおもしろい。

(B)。ウサギとヘビの写真を並べ、どちらが「もふもふ」しているかと外国の人に聞いたら、意外と正解率が高いのかもしれない。

③動物の毛などが豊かでやわらかい(b) サワリ心地であるさま、とデジタル大辞泉は(c) トク。2000年代に生まれた表現だ。文化庁の「国語に関する世論調査」で、52%が「もふもふ」を使うことがあると答えた。もはや定着したといっているのかもしれない。

④(1) 三島由紀夫は、こうしたことば(d) ツカいに厳しかった。抽象性がなく、子どもや女性の文章に多く、言語本来の機能をもたない(e) ダラクした形だ、と『文章読本』でやつつけている。(2) どうも意見があわない。

⑤冒頭の本が、オノマトペの弁護士役を買って出ている。他のことばと同じように、時代で意味が変わり、新たな表現も生み出せる。「二人前の言語の一員」である、と。

⑥(C) (3) 「きらめく」も「よろける」も、もとはオノマトペだった。これから先、どんな新しいことばが日本語に登場するのか。きよろきよろ、どきどき、にやにやしながら見守る。

問一 傍線部(a) (e) のカタカナを漢字にせよ。

問二 空欄Aに入る一字の漢字を記せ。

問三 空欄Bに入る最もふさわしいもの次から選び記号で答えよ。

ア 名は名を表す イ 名は体を表す ウ 体は体を表す エ 体は名を表す

問四 空欄Cに入る最もふさわしいもの次から選び記号で答えよ。

ア つまり イ しかし ウ そうして エ 例えば

問五 傍線部(1) 「三島由紀夫」の作品を次から選び記号で答えよ。

ア 破戒 イ 羅生門 ウ 雪国 エ 金閣寺 オ 人間失格

問六 傍線部(2) 「どうも意見があわない」とあるが、筆者の意見が表れている一文をこの段落以降より書き抜き、その最初二字で示せ。

問七 傍線部(3) 『「きらめく」も「よろける」も、もとはオノマトペだった』とあるが、「よろける」のもとになっているオノマトペを記せ。

問八 「オノマトペ」を使用している一文を書き抜き、その最初二字で示せ。

問九 この文章を起承転結の四つの段落に分ける場合、「転」に相当する段落はどこからが最もふさわしいか。段落番号で示せ。

三 次の①から⑤の四字熟語の()に入る数を示す漢字をそれぞれ答えよ。またそれぞれの意味を後ろの「意味選択肢」から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----------|-----------|------------|
| ① () 里霧中 | ② () 面六臂 | ③ 森羅 () 象 |
| ④ () 死一生 | ⑤ () 律背反 | |

意味選択肢

- | | | |
|-------------|--------------|------------------|
| ア 辛うじて助かること | イ 宇宙に存在するすべて | ウ ひとりで何人ぶりの働きをする |
| エ ジレンマ | オ 迷って方針が立たない | |